

■学位論文内容要旨

子どもの思いに寄り添った支援とは何か ——場面の切り替え時の保育者の関わりを中心に——

中島 國恵 (2020年度修了)

1 はじめに

近年、「発達障害」という言葉をよく耳にするようになった。保育所では、障害児保育が行われ、障害のある子どもと、定型発達の子どものが、同じ時間や場を共有し、その中で互いに育ち合うことを目指してきた。保育園保育士は、保育の専門家であり、療育の専門家とは違い、障害の発達特性や療育方法などもわからないまま、手探りで支援を行っている。行動の特性などから定型発達の子どものと同じ場や同じことを嫌がる傾向が顕著である子どもに対して、ともすると教えることが優先され、大人である保育士が主導権を握って「させる」ことが多くなる。皆と一緒に同じ活動が出来れば良い、経験を少しでも同じにしたい、そんな保護者や保育者の願いが強くなればなるほど、障害のある子どもに対して、療育の手法を安易に取り入れ、「今は、〇〇する時間」と活動を強要するようなことになる危険性があると危惧される。

2 研究の方法

本研究では、保育園等での障害児保育の現状と課題や、療育方法の理論を文献から確認し、事例から「こだわり」と言われる行動をとる時の子どもの心の理解の分析を行い、保育現場で一人一人の発達に応じた療育方法との融合を考え、子どもの思いに寄り添った具体的支援方法を明らかにする。

3 研究の結果

第1章では、障害児保育の現状と問題点を明らかにした。まず1点目は保育士の若年化である。保育園に勤務する、6年未満の保育士は全体の40%、6~10年未満は16%、10~14年未満は12%、14年以上の経験者は28%と経験者ほど少なくなっているのが現状である。また正規・非正規職員の割合は、正規職員は、45%に対し、非正規職員は56%と、非正規職員が正規職員を上回っている。これは、人手不足を補うためや、働き方改革のため様々な勤務形態によるものと考えられる。

2点目は保育士の実戦上の課題である。保育士の抱える悩みは、20年前と変わらず「社会性」「身辺自立」「こだわり」「情緒の安定」などが挙げた。自身の経験からは、様々な場面でどうしても「こだわり」を持ち、切り替えられない子どもの姿を見かけることが多い。保育現場では、経験の浅い保育士が障害の理解そのものもままならない実態があり、自分なりに調べたり、本を見たりして、視覚支援など取り入れやすいものを利用して支援を行っている。しかし、本来の目的からは外れ、指示どおりに子どもを動かすツールになっている。また、教えることが優先され、目の前で起きる問題の行動を減らしたり改善したりすることに走ってしまう。それにも増して子どもの心の動きを読み取る保育士の子ども理解が必要なのではないかと考える。では、どうすれば子どもを見る目が養われるのだろうか。そのためには、保育を振り返り保育者としての見方、考え方を省察することが必要となる。

第2章では療育の歴史を紐解き、療育の意義について述べた。さらに様々な療育法の中から、応用行動分析、

受容的交流療法について考察をした。応用行動分析については、今まで、正確にその方法や意義が理解されておらず、誤解をしていたことが明らかになった。「心を見るのではなく行動を見る」と自身が療育に携わっている時には言われたが、それは全くの誤解で、子どもの行動には必ず意味があり、そこには子どもの心の動きがあることが明らかになった。また、受容的交流療法では、大人と子どもとの間には、信頼関係が大切であり、それは保育にも言えることであった。その信頼感を築くことには、お互いの受容が必要であるということ、あるがままの姿を受容することから始まるということが明らかになった。

このように、療育の手法も保育も、根幹にあるのは、互いの信頼関係であることが明らかになった。

第3章では、まず場面の切り替え時の保育士の関わりについて検討した。保育現場で、気持ちが切り替えられるのは、時間に区切りが入る時、小さなことでも何かをやり終えた時、成し遂げた時、それはそれまでの遊びが楽しかったということを確認できた時である。つまり充実感や達成感が子どもの心に時間の区切りを作るためである。場面の切り替えがつかないということは、障害特性だからと療育的なツールを使うことが多く見られるが、保育の中では障害を持った子どももそうでない子どもも、気持ちの切り替え時に焦点を当て、キャッチしづらいほんのわずかな心の動きを読み取り関わっていくこと。また、一方的な大人の都合で切り替えるのではなく、子どもと共にとことん遊びこむ保育士の関わりが重要ではないかと言える。

次に、第2章で確認した理論を基に保育現場の中でありがちな場面の切り替えが難しいと考えられる事例をあげて、保育者の関わり方を検討した。検討には、考えられる保育士の関わりをあげ、応用行動分析、受容的交流療法、そして、保育的な考え方を当てはめながら検討を

行った。事例は、遊びを終えられない例、遊びに入れない例、思い通りにならず、気持ちの切り替えができない例、興味が移って集中できない例、いずれも保育園での事例を筆者がアレンジしたものである。この4つの事例の保育士の関わりから、導かれることは、どんな療法で支援をしたとしても根幹にあるものは、あるがままの子どもを受け入れ楽しい体験を共有し、共感し合う心の交流を繰り返すことであり、小さな心の揺れを見逃さず、褒め認め、充実感や達成感を共有することであると言える。このことを忘れず保育していくことは「こだわり」(場面を切り替えられない)と言われる行動をとる子どもや全ての子どもに言えるのではないかと考えた。

4 おわりに

本研究では、大人が主導権を握り「させる」ことに力を注がれている昨今の療育の手法や保育士がその手法を安易に使っていることに疑問を感じ、障害児保育とは何か療育とはどんなことなのかということについて突き詰めていくことから始まった。それぞれの理解を深めることで、療育も、障害児を含めた保育についても根幹にあるものは同じだということが明らかになった。では、子どもと楽しい体験を共有するためにはどのようなことをすれば良いのかと考えると、細切れに時間を区切られた生活や、行事のたびに「させる」「みせる」保育になってしまう現実を変えていくことが必要なのではないか。行事のあり方を考える、1日のスケジュールを簡潔でわかりやすいものとする。とことん遊ぶことのできる時間の保障をするなど保育のあり方自体を変えていくことも必要であると考え。さらに、保育士は、障害の理解や、子ども理解のための子どもを見る目を養っていくことも今後の課題となる。